

『赤 壁』 袁 枚

蘇軾の雅遊に思いをはせる

清朝の詩人袁枚は二十四歳で進士になるが、若さに不安をもたれたせいか妬^{ねた}みのためか、地方にしか任官されなかった。

それ故に袁枚は官僚の生活に嫌気がさし、三十三歳(?)の時に官を辞して生涯官職に就かなかった。

「随園」と名づけた土地で隠遁自適し、高潔風雅の生活を送った。

赤 壁 袁 枚

一面東風百萬軍 一面の東風百萬の軍

當年此處定三分 當年此の處三分を定む

漢家火德終燒賊 漢家の火德終に賊を焼き

地上蛟龍竟得雲 地上の蛟龍竟に雲を得たり

江水自流秋渺渺 江水自ずから流れて秋渺渺

漁燈猶照荻紛紛 漁燈猶照らす荻紛紛

我來不共吹蕭客 我來たつて蕭を吹くの客と共にせず
鳥鵲寒聲静夜聞 鳥鵲寒聲静夜に聞く

字 解

- ・漢家火徳…漢家は漢民族中心の蜀をさす蜀は五行(木・火・土・金・水) からいつて火の徳を以て王となることになっていた蜀が魏を破るに火攻めの計を用いたことに引用した表現
- ・池上蛟龍…劉備と周瑜(呉の将)をさす。蛟龍とはまだ龍にならない龍のことみずちともいう
- ・荻……………おぎ 葦の類
- ・吹蕭客…………蘇軾がここで蕭を吹く客と共に遊んだことをさす
- ・鳥鵲……………かささぎ

〔意解〕

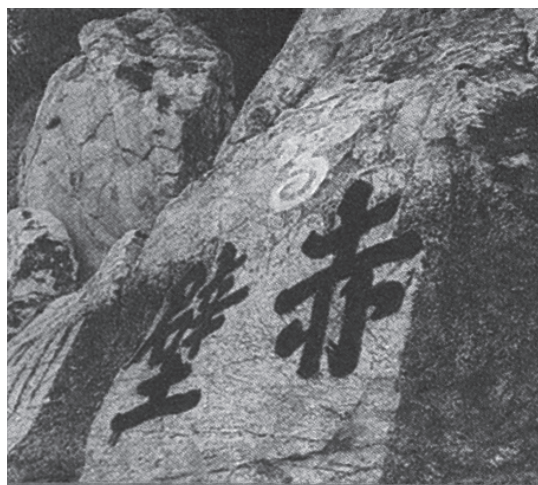
呉と蜀の連合軍は折から吹きまくる東風を利用して、火攻めの計を用い、ここ赤壁で魏軍百万の軍勢を破り、天下を魏・蜀・呉に三分して治める計が確定した。(かねてから蜀相諸葛孔明は「乱世を治めるには魏と蜀と呉の三国が天下を三つに分けて統治する」と説いていた。)

この戦果として蜀(漢)の火徳が魏の曹操の軍を焼きつくし、池上の蛟龍といわれた蜀の劉備玄徳が遂に雲を得て

大勝利を遂げたのである。

今、自分はここに来て周囲を眺めると長江の水は当時のまま流れており、江上の秋の景色ははるかに広く連なっているのである。また漁舟のもしびは岸辺に茂る荻を静かに照らしている。

自分はこのたびの舟遊びで、かつて蘇軾が試みたような蕭を吹く人を連れては来なかったけれど、一人静かな夜にかささぎの寒々とした鳴き声を聞くと、往時が偲ばれて真に心が動かされるのである。



詩の背景

赤壁の場所

赤壁の古戦場と伝えられる場所は長江・漢水沿いに数箇所存在し、その是非については現在も議論があるが、有名な所が二箇所ある。

一、現在の湖北省蒲圻市西南の長江南岸に位置する赤壁山

である。ここは実際の古戦場として最も有力視され、
「蒲圻赤壁（武赤壁）」と呼ばれている。――A

二、現在の湖北省黃州市西北の長江北岸の赤鼻山である。
「黃州赤壁（文赤壁）」と呼ばれている。

晩唐の詩人杜牧の「赤壁」や北宋の詩人蘇軾の名文「赤壁賦」で実際の古戦場以上に有名になった。――B

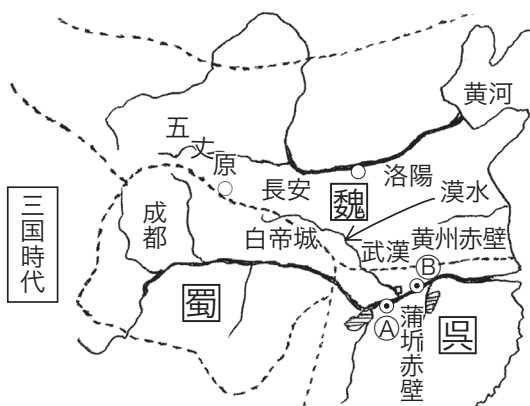
三国志の舞台となった湖北省

長江の中流域にあり三峡を下ったところ。交通の要所である。三国時代、この地は荊州と呼ばれ、魏・蜀・呉どの国にとっても一番欲しかった地域。

華北を制した魏軍はこの江南の地を手に入れた天下統一を目論んだ。

赤壁賦（前）

壬戌の秋七月既望、蘇子客と舟を乏かべて赤壁の下に遊ぶ……（略）客に洞簫を吹く者有り。歌に倚りて之に和す。其の声嗚嗚然として怨むが如く慕うが如く、泣く



が如く訴うるが如し。余音嫋嫋として、絶えざること縷（いと）（い）との如し……（略）

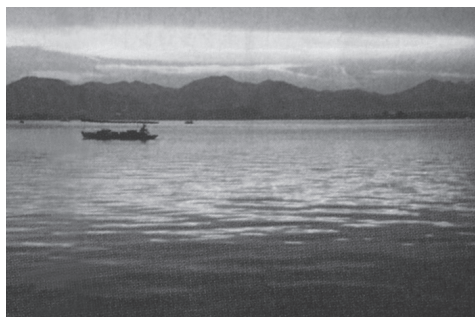
吾が生の須叟なるを哀しみ、長江の窮まり無きを羨む。……

（略）唯江上の清風と、山間の明月とは、耳之を得て声と為し、目之に遇いて色を成す。之を取るも禁ずる無く、之を用うるも竭きず。是造物者の無尽蔵なり……（略）

この賦は蘇軾が黃州（湖北省）に左遷された時代に作られたものである。

名月の夜、友人を誘って江上で舟遊びをした時、客人曰く「三国時代にこの場所で川岸が真紅に焼けるほどの激しい戦いをし、歴史を動かしたあの一世の英雄曹操でさえ、いまは影も形もない。ましてや私やあなたの人生はかげろうのようにはかないものです。」と。

それを聞いた蘇軾は「長江の水はいつも流れ去っているけど尽きることはないし、月はいつも満ち欠けしているけれども消えるわけはありません。変化し続けているのうに見えるものも、見方を変えれば不変だともいえるのです。万物は止めることができません。」



長江

この世は空しく限り有るものばかりだと思ふかもしれないが、目を転じれば風の音や月の色、自然が与えてくれる美しさや、喜びは無尽蔵です」と。

鑑賞

「赤壁の戦い」は清朝の作者袁枚から年代をさかのぼれば約一五〇〇年前の出来事で、蘇軾が詠んだ「赤壁賦」は約七〇〇年前である。

「静」の中に身をおく蘇軾。人の世の定めなき移り変わりと、移り変わりがあっても不変の自然、だからなおさらのこと蘇軾は生きている喜び、その喜びを深くするため、賦に表し自然の営みの美しさ、それに対して感動の喜びを感受しようと思ったのだろう。

一方本題では前半四句が過去を、後半四句は作者の現在を表している。前半は兩岸を焼きつくすほどの興亡の烈しさをうたい、それが烈しければ烈しいほど後半四句の静寂さが鮮かに浮かびあがる。「動」と「静」の対比である。

作者袁枚は、蘇軾のいう心象風景から脱け出し、自分も江上に舟を浮かべて、蘇軾の心境に思いをはせたのではないか。

若くして官を辞してから四十数年間隠遁自適の生活を送った作者もまた、山水の自然を愛す風流人であった。